

Paper Dome Letter

台湾・神戸まちづくり交流報 第5号 2007/12/25 発行

Gaga に導かれて……

——台中県和平郷達観部落



部落厨房は開放的な空間、タイヤルの伝統や生態に配慮、簡素な味わいを持つ。

文／何貞青

馬拉邦山(マラバン山)の嶺を越えた旋風は、ひゅうひゅうと達観部落の上空を吹きすぎる。広々とした大安溪の水流は滔々として絶えることなく、タイヤル族の人たちの眼前を勢い良く過ぎる。

大安溪畔の小山村である達観部落は、日が昇り月が落ち、時代の潮流の中にあっても終始静かで目立つことはなかった。

平凡で静かな小部落

台中県と苗栗県の県境にある達観部落は、行政区域は台中県台中県和平郷達観村(竹林、達観、雪山坑の3部落)に位置し、村民はタイヤルの北勢群が多く、農業に従事している。大安溪に沿った13部落の中、120戸、417人の達観は、良く知られる双崎と象鼻の2部落の中間にあつて、目立った特色に乏しく、路ゆく人や車も気づかず通り過ぎることも少なくない。

2005年6月18日、普段静かな達観部落は各地からお祝いに駆けつけた人々の声で沸き立った。今日は達観部落共同厨房「L'olu



達観部落共同厨房の開幕式、タイヤルの男たち伝統の餅つきを競う

珈琲屋」の開幕である。

自然が発する音色に似たタイヤルの歌謡が部落の天空に響き渡った。部落の成年が餅をつくタイヤルの伝統行事、餅つきの技を競って奮い立つ。厨房に立つヤダ(タイヤル語でおばさん)たちが運ぶ自ら考案した伝統料理、雅大咖啡、ウワオ(タイヤル語で酒の意味)珈琲、樹豆パン、水果玉米……などが食欲を誘う。

この日、珈琲屋の開店祝だけでなく、厨房の仲間たちが部落経済から市場経済へと踏み出し自立自主の路を歩き出そうとする宣言でもあったのだ。

タイヤルの「祖訓」に転機を見出す

921 地震後の 2000 年の春、中華至善社会服務協会は台中県和平郷に入り、双崎に「大安溪部落工作ステーション」を設立、大安溪流域に医療派遣、児童補講、青少年奨学金、高齢者への給食サービスといった福祉活動を展開した。

活動リーダーの黄盈豪は工作ステーションのキーマンで、震災後直ちに部落に赴き今に至っている。「私たちは部落の中に若い人たちが育って、地域の活動グループとなって、自分たちのふるさとづくりを進めて欲しいと願っています」早くから部落生活に溶け込んだ盈豪はずっと抱き続けてきた理想を語る。

2002 年頃から工作ステーションは、当初の計画以外にも成人教育、社区营造あるいは産業振興とテーマを広げていき、多くの部落青年に力をつけ仲間を増やした。2003 年になって双崎の工作ステーションは賃貸期間が終了したため、達観部落に移転し、達観部落のフィールド調査を始めた。その中で接触した老人たちの言葉の端々に Gaga(タイヤルの祖訓)が登場するのだ。たとえば、「1羽の小さなマタビしか捕れなかったときでも皆で分けて食べるべし、たとえ少しずつでも味いは勝る、こっそり独り占めするならば味いは劣るべし。」というように。

これは正に「分享(分かち合い)」の伝統で、かつての部落に息づいた核心的な価値観だ。

「部落を市場メカニズムや時代潮流に埋没させないためには、このような価値観を再発見し、重視することが必要なのかも知れない。」部落の転換問題に長く考えをめぐらせてきた盈豪の脳裏に、次第に方向が固まってきた。

その後彼は行政院 921 重建委員会や県政府社会局の資金を導入、部落共同厨房の計画を提出、三叉坑、双崎、達観の弱者を優先的な対象として、農園を開設、近隣の支援がない老人たちに食事サービスの活動を行った。厨房の仲間たちは、最も簡単な「食事」ということから出発して、かつて以前の「共食共享(共に食し共に楽しむ)」というメカニズムを回復しようとしている。

このように、Gaga に導かれて、達観は伝統の中から新生の道筋を見出すべくその 1 ページを開いたのである。

崩壊した部落 V.S. 共食共享



達観部落共同厨房ができて、伝統の学習や市場経済への関心が高まる



共同厨房のお母さんたち、得意のタイヤル料理での経営に挑戦



黄盈豪は部落共同厨房の最も重要な推進者

しかしながら、最初の頃は仲間たちにも理解しにくかった。

「共食共享は確かに以前タイヤルの伝統だったけど、今ではすっかり漢化してしまったよ！」3年ワークショップで共に活動した林素鳳、彼女を含め達観部落人自身がどうしていいかわからないだ。

「今では部落はすっかり解体したよ、平地の小家庭の生活と変わりはない。いまさら皆を食事に引っ張り出して、状況は変わるのかね」三叉坑部落の仲間林建治も懐疑的だった。

しかし、最後にはやってみようということになった。班員たちは毎朝仕事が終わるとみんな一緒に厨房で昼食をし、通りすぎる人を招きいれて共に食事をした。最初はなれなかったが、しばらくすると一緒に食べるという別の味わいが出てくる。食べることから始めて、班員たちは徐々に「共同」によって物事が進むことを学び、みんなが一緒にいるだけでさまざまな事が実現することを見出した。

たとえば、これまで甘柿の販売や伝統農作では搾取されることは避けられなかったが、今ではみんなで合理的な販売方式を開発、ネット販売などを通して、中間搾取を免れている。また、共同購入を通して人件費を節約したり、貯蓄互助会を設立し、高利ローンを借りなくすむようにする…などだ。

学習と市場対話

2年が経ち、部落厨房は確実にその力量を高めてきたが、政府の経費補助が終了したときの存続問題は依然解決したわけではない。

2004年末、盈豪は班員たちと経営産業化の可能性について討議を始め、みんなの共通認識のもと、市場経済に入ることを決定、自分たちの力で厨房の活路を見出そうと考えた。L'olu 珈琲屋の開店はつまり彼らが市場と対話を始める第1歩なのだ。

しかし、商業システムと部落の互助の道理とは本質的に衝突する。このジレンマに対し、盈豪は折衷方式を取ることにした。「現段階で市場経済に対抗することは大変難しい、とにかくみんなに注意を喚起し、原点の共享の精神を忘れることなく、最初になぜこうしたことを始めたのかを忘れないようにすることだ」だから、営業が始まってからも共同方式を堅持し、盈豪は時に仲間があまりに急いで利益を求めることを戒める。

たっぷり時間をかけながら

部落厨房は開放空間だ。門も囲いもなく、誰でも入って自由におしゃべりが出来る。厨房にあるすべてのテーブル、そして傍に建つ高脚屋、これらはみんなの手作りだ。実は珈琲屋の完成予定は年初めだったが、年半ばにやっと出来た。というのも、みんなが多くの行程を自らの手で作ることにこだわったからだ。

「我々も勿論お金を払って専門家に販売や新産品開発を頼むことも出来るし、また早く成果が得られるかも知れないが、これでは何時までも部落にとって本当の成果が生れない。」そして盈豪は強調する。「私たちは時間をたっぷりかけても、こうした過程をたどりたい。」

そして、こうした過程を経る中、確実に、多くの人の考え方や価値観が徐々に変わってきた。

現在、厨房の班員は22名で、仕事の内容にしたがって、農園組、営業組、伝統組、行政組に分かれている。

毎週月曜は部落厨房の仕事配分の日だ。朝早くから、班長の張添光さんの指揮・調整がはじまる。

張添光さんは以前平地で電子・家電製品販売場に投資していたこともあり、ビジネスの感覚も持っている。921地震の後会社は倒産し、妻の林素鳳さんと山に帰り田を耕すしかなかった。

「山に帰るなんて考えもしなかったが、会社が倒産するなんてね！」と添光さんは嘆く。しかし、彼は後悔していない、外では高い



「L'olu 珈琲屋」が始まり、自主自立の道を探り、厨房経営の学習に力を入れる



部落厨房の市民農園、外部援助を求めながら、弱者の支援や厨房の運営に活用する

収入を得る仕事も多いが、山に留まってこの厨房を軌道に乗せたいと思っている。

添光さんはいう。「私は部落でこのようなものを創り出せるとは思いもよらなかった。山下でただお金儲けのことばかり考えるやり方と全く違う。」だから、ビジネスのやり方を習った彼は、現在は財源を見つけ出そうと考えるときも、弱者への配慮を忘れない。

張月嬌さんは厨房のシェフだ。20年間家庭の主婦だが、今は客用の料理を学んでいる。「私たちのタイヤル料理は見た目お粗末だが、中身は豊かで、この地で取れたものや自分で育てた野菜、自分で飼っていた地鶏など、自然そのものが特色ね。味は誰にも負けないよ！」月嬌さんはタイヤル料理コンテストで1位になったことがあり、家政班班長としてタイヤル料理改良改善の責任者でもある。

「厨房の存続は皆が一緒に考えるべきこと、私たちには運営の経験はないけれど、ともかくしばらく努力をしなければ。」月嬌さんはやる気満々だ。「もし厨房が上手く動きだせば、みんな部落に留まって、外へ仕事に行かなくてもすむのよ。」

想像力の湧き出るところ

「部落は長年にわたって指導され、助けられてきたため、かえって自分で考え、行う習慣がなくなり、人が来て助けてくれるのを待つようになった。」現在厨房の企画を支援する林建治氏はこう指摘する。「しかし、部落厨房という場所はそうしたやり方を覆し、みんなで方策を見つけることを学び、想像力が徐々に湧き出している。」

彼は一つの事例を話す。有る時農園の地鶏を食べたいという台北の人に、2羽を持っていくと、「あなた方の鶏はどうしてこんなにやせての？」と見るなり思いもよらぬ言葉が返ってきた。

「山で放し飼いにした鶏ですよ。山を走り回って痩せているからこそ美味しいのですよ！」建治はあわてて説明した。

「でも産後の養生に欲しいの。だから肥えたのがいいのだけど。」

「え？産後の養生には肥えたのが…。」

この体験は彼にヒントを与えた。「うん、ひょっとしたら産後センターと共同できるかも。」「そうだ、女の子は皆子どもを生むのだから、われわれの鶏のいい市場になるぞ！」

少し奇抜かも知れないが、瓢箪から駒、かえってこれから努力するに値するものになるかも知れない。

このほか、経費を集めるため、文教機関との共同を試したり、原住民歌謡の実演をしたり、観光開発のため竹杯のDIYを研究した。「私たちは座して死を待つわけにはいかない。」建治は真剣だ。「更なる一歩が上手くいくかは誰にも判らないが、踏み出さなければ永遠に始まらない。」

部落全体を向上させる

深く漢化の進んだ達観部落も、部落共同厨房が動き出してから、Gagaも次第に生活の中に甦ってきた。どうしてこんなに長く厨房が続けられるのか？Gagaでそんなにいいものなの？部落の人たちも考えるようになってきた。考えると同時に、伝統文化に対するさまざまな課題が、族人の脳裏に甦ってきた。

厨房の存在によって特色の無かった部落に外からも注目が集まりだし、小部落に何か活動している人たちがいるらしいと話題になった。

最近になって、彼らは厨房と部落全体の関係について考え始めている。厨房と部落全体とは距離がある、厨房がどんどん進んで、部落の理念が追いつかなかつたら、両者はやがてちぐはぐになってしまう、と建治は冷静に言う。「われわれは厨房と部落の関係を緊密にし、厨房が独走しないようにしたい。やればやるほど離れることになる。」だから次なる課題は、「部落全体が追いつくこ



自分自身の文化を知ること、Gagaが伝承されるかどうかの鍵となる。



部落に深く根付いて、部落の心の理解者といわれる黄盈豪は、達観に人材が育つことを願う。

とだ」と強調する。

「われわれが天真爛漫なところで努力を続けていけば、次第に多くの人たちの理解が得られるものと信じている。」接触があれば機会も増える、厨房の仲間たちはそう期待する。

かつて、この小部落では、外来文化や産業の進入を経て、自らの族裔としての言葉を忘れていた。今、Gaga の導きの下、心ある部落活動者や青壮年は協力して、先祖の足跡から新たな歩みを始め、小さな部落の発音学習を改めて開始した。まだ困難はあろうが、日増しに清く遠く響くことを願いつつ……。



族人達は伝統の技芸や歴史の理解を深める、これは今後の発展の資産だ。

発行／たかとりペーパードーム台湾再生計画推進委員会

日本事務局 たかとりコミュニティセンター

E-mail : office@tcc117.org

台湾事務局 新故郷文教基金会

E-mail : land@homeland.org.tw

Paper Dome Letter

台湾・神戸まちづくり交流報 第5号 2007/12/25 発行

アジア女性のエンパワメントをめざして

たかとりコミュニティセンター

アジア女性自立プロジェクト (AWEP) の活動ご紹介



1997年、AWEP事務所開設パーティで

AWEP 代表 森木和美

アジア女性の仕事作りから

たかとりコミュニティセンターの一角で活動を続けさせていただいているアジア女性自立プロジェクトです。英語名が、Asian Women's Empowerment Project で、AWEPとも言っています。英語名が示しているように、女性のエンパワーメント(力をつける)をめざしています。

AWEPは、1994年8月、フィリピンから来日した女性グループと神戸の女性たちとの出会いから生まれました。フィリピンでは仕事がなく、外国に働きに行く女性が増えていました。1980年代後半、アジアの女性たちが日本にエンターテイナーとして働きに来ることが可能になり、日本人男性との結婚も増えていきました。中には日本人男性の援助が得られないまま子どもを産み、その子どもを育てるためにフィリピンに帰国した女性たちもいました。彼女たちは子どもをフィリピンに置いて、再び外国へ出稼ぎに行きました。

フィリピンではそのような子どもたち、ジャパニーズ・フィリピーノ・チルドレン(JFC)が増え、社会問題に発展、女性のサポートや子どもの日本人父を探すNGOができました。日本にこの問題を訴えるために来た女性たちに会い、子どもの父親探しを手伝って

いううちに、日本で何ができるのかを考えました。なんとか彼女たちが子どものそばで働けるように協力したいという思いがあり、AWEPを設立、女性の仕事作りを始めました。私たちは女性の周縁的な地位や役割を見直し、女性の人権を守りたいと考えています。日本とアジアの関係をみると、日本人男性による「買春観光」があり、「エンターテナー」としてのアジア女性の来日、[アジア人花嫁]、「JFC」の誕生、父親の責任放棄など、偏ったジェンダー(女性/男性)関係があります。特にJFCの問題は、日本人男性が母子を置き

去りにしたことによって生じる精神的、経済的、社会的問題が大きく、今も解決されていません

たかとり拠点を得て

活動を始めて2年間は事務所がなかったAWEPですが、阪神淡路大震災がおきたときは、神戸に住んでいる外国人の救援に集中しました。神戸には日本人と結婚したフィリピン人が住んでいましたが、彼女たちは孤立しており、支援が必要でした。そのときに知り合った神田神父のご好意で、1997年からたかとり教会の中の活動団体に加えていただきました。その後は、活動拠点ができたのですから、外国人女性が学べるワープロ教室や料理教室、日本語教室、電話相談と、在日外国人女性への支援の輪が広がっていきました。

一方で、フィリピンでは仕事作りの成果がでてきており、フィリピンの伝統的な布のカバンや小物、服までが届けられるようになりました。たくさん製品を売っていかねばならなくなり、イベントやバザーなどに出店し、販売活動をしました。アジアに伝わる更紗木綿やアバカ(芭蕉科)などの布や織物を使って作られた製品を販売しながら、アジアの状況や女性たちの置かれている立場を日本社会に訴えてきました。そのためにはアジアのことをもっと知りたいと思い、フィリピン、タイ、インドネシア、ネパールへ行くスタディツアーを実施し、日本では在日外国人の話を書くセミナーなどをしました。

連携と協力の拡大

パートナーファン(タイ語で夢を織るという意味)というタイ女性の縫製グループの製品を日本で販売するようになりました。貧しい北タイの農村では女性の人身売買が起き、それを防ぐために女性たちが農作業の合間に小物を作り始めました。これらの小物の特徴は山間部に住むヤオ族の伝統刺繍が施されていることです。できるだけその土地に残っている伝統素材を使った製品作りを目指していますが、場所によってはその伝統もなくなる傾向があります。フィリピンのマニラではバティックを売っていた店がなくなり、同じ文化を受け継いでいるインドネシアにバティック探しに出かけました。そのような関係から、インドネシア中部ジャワの村で実際にバティックを生産している人たちにめぐり会いましたが、そこでもバティックの模様を描く女性が少なくなっているようでした。インドネシアの農村でも現金収入がなく、町へ働きにいかねばならないのですが、家で子育てをする女性は蚕の繭から糸を紡ぐ仕事を作り出し、村おこしをしていました。その糸で布を織り、バティックを生産するプロジェクトができていましたが、現地では需要がなく、私たちAWEPが参加して日本で販売することになりました。

コミュニティ・ビジネスとしてフェアトレードに取り組み

物を「あげる」「送る」活動に終始しがちだったこれまでの国際協力を、就業支援という形で活動を開始したものの、バザーやイベントだけの販売では継続的な支援にはなりません。フィリピン、インドネシア、タイのあとにネパールの女性たちとのつながりを持ちはじめ、止めることも難しくなっていました。それぞれの国から物品を適正な価格で輸入・販売することをビジネスとして考えてみよう、兵庫県が始めたコミュニティビジネス離陸支援事業に応募し、開業資金の援助を得ることができました。その後、このような草の根貿易を「フェアトレード」という名前呼び、金儲けを目的とする企業や商社の貿易に対抗する言葉として定着していくこととなります。



イベントに出店



タイへスタディツアー ヤオ族の服を着てみた

在日外国人女性への情報提供と相談事業

阪神淡路大震災後に在住外国人向け生活相談を始めて 10 年以上になります。この間、在住外国人との交流の場づくりと生活相談活動、就労やパワーアップを目的とした日本語教室、学習会そして情報発信をしてきました。最近では外国人相談や支援を行なう公的・私的機関が充実され、AWEP の相談専用電話も鳴ることが少なくなってきました。しかし、不安や心配がなくなったわけではなく、外国人女性が気軽に相談できる場所が必要です。日本の地域社会で生活する上での情報や知識は常に求められ、ニーズは全般的なものからその人の状況に応じたもの、緊急性を要するものまで多岐にわたります。そのような「問い」に応えるために 3 年前から[モバイル通信]を行っています。これは、携帯メール機能を使って、希望者に定期的に生活情報メールを発信するというものです。万が一地震などがあれば役に立つものになりたいと思っています。

女性たちのエンパワーメントと社会参加

AWEP は生まれた場所、育った場所、性別や年齢、身体の障害、性的思考階級、民族などの違いによる不平等や格差を生み出す構造を変え、一人一人の人間が持っている能力を活かし、協力しながら生活できる社会づくりをめざしています。これまでの活動では「南」の国々から日本に出稼ぎに来る女性たちに焦点を当て、日本社会の歪みを訴えてきました。アジア女性の就労支援である製品販売を通して、また学習会やスタディーツアー、相談、広報活動、問題提起、エンパワーメント講座などを行いながら、日本人を含むアジアに生きる女性たちが国境を超えてエンパワーし合える社会を築きたいと、願っています。

女性住民の声を市政に反映するための提言、情報や知識の発信と共有も視野に入れて活動しています。会費と寄付、製品販売、助成金などで会を運営していますが、設立してから10年以上たった今も、経済的な困難は変わりません。このような活動を支援する会員やボランティアに支えられ、継続することができます。



外国人女性のお料理教室 旧たかとり教会台所



旧たかとり教会の中庭で会員同士の夏の集いをした

アジア女性自立プロジェクト

Asian Women's Empowerment Project



653-0052

兵庫県神戸市長田区海運町 3-3-8

E-mail awep@tcc117.org

URL www.tcc117.org/awep

発行／たかとりペーパードーム台湾再生計画推進委員会

日本事務局 たかとりコミュニティセンター

E-mail : office@tcc117.org

台湾事務局 新故郷文教基金会

E-mail : land@homeland.org.tw

